



雨水利用を進める全国市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島1-8-1

TEL: 03-3611-0573

FAX: 03-3611-0574

H.P: <http://www.rain-water.org/>

雨水利用を進める全国市民の会 2001年度 定期総会 開催

すみだ環境ふれあい館で

水危機の世紀といわれる21世紀、最初の総会です。水の環境は、さまざまな環境問題と連動して世界的規模で深刻です。安心して暮らせる地球を守る諸活動の必要性が増えています。

「志は人類的に、実践は足元から」とは会長の言葉ですが、雨水利用を進め、きれいな雨の循環社会を取り戻すための、雨水利用を進める全国市民の会の活動へみなさんのより一層の、積極のご参加をお願いします。

市民の会では、昨年度は都市型洪水対策としての雨水利用について現地調査などを行い、8月の「雨水フェア」では都市型洪水をテーマにしました。台湾やバングラデシュにおける雨水利用の調査や提言、講演など国際協力も活発に行われました。会員を対象にした連続講座も盛況でした。さらに雨水利用の事業者会の設立にも協力、雨水利用自治体担当者連絡会と共に、手を携えて行く大切なパートナーとなっています。「雨の事典」も完成・出版が近づいています。

今年度も多様な活動が展開される予定です。8月には高松市で雨水セミナーが開催されます。また、まとまった情報や論文などをみなさんにお届けする、活版印刷の「雨水年報」(仮題)の発行も進められています。さらに、雨水利用の場合にも下水道料金を一律に徴収される現在の不合理な制度について、問題提起を検討する予定です。国際貢献にもいっそう前向きに取り組みます。特筆すべきは、この総会の会場となる「すみだ環境ふれあい館」に「雨水資料館」がオープンしたことでしょう。未来をにう子供たちの環境教育の場としても、多くの市民が雨水利用について情報を得る場としても、国際雨水センターを展望しつつ、この資料館の活動を活発に、地道に展開していく必要があります。

総会へ、どうか万障お繰り合わせてご出席ください。



定期総会へのご参加を

二〇〇一年六月二六日(火) 午後六時半から

場所 すみだ環境ふれあい館

新しくオープンした併設の雨水資料館をぜひごらんください

環境学習の拠点 すみだ環境ふれあい館・雨水資料館

5月14日 **オープニングセレモニー** 開かれる

■ 今関 久和

5月14日、すみだ環境ふれあい館が開館しました。

オープニングの当日、内覧会が始まる30分前の2時ころに行ったのですが、入り口前ですでにセレモニーが行われており、門から人があふれていて、中に入れませんでした。見回してみると近所の人たちや小学生、マスコミの方々がたくさん来ていました。しばらくして、セレモニーが終わり、開場になるとドットとなだれ込むように参加の方々が中へ入っていき、どうやら周囲の状況がわかるようになりました。

入り口の左横にはスリランカの雨水タンクが置かれています。パンプキン（かぼちゃ）タンクともいわれているようで、なるほどと納得する形をしています。実際に、スリランカの人たちが協力して作り上げたものだそうです。その横にはタンクの内部の構造や作り方がよくわかるようにと、骨組みと金網を組んだものが並んでいます。そして、入り口前には徳永暢男さんが作った雨水利用の庭があり、雰囲気を出していました。

さて、中に入ってびっくり。何日か前に飾り付けを手伝ったときには、まだどのような形になるのかさえ想像つかない状態でしたが、ライトアップされ、バナーやいろいろな展示物などが置かれ、世界にひとつしかない雨水資料館ができていました。

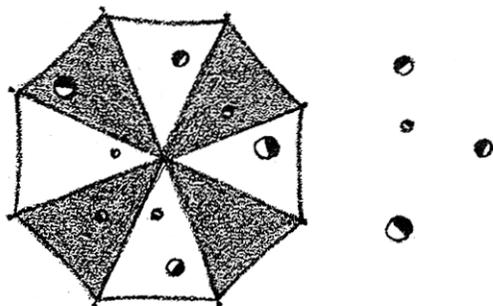
この、すみだ環境ふれあい館には、雨水資料館のほかに、リサイクル工作や環境調査キットの工作、水や大気に関する簡単な実験などができる**環境工作室**、セミナーや環境問題に関する市民団体の会合に利用される**交流スペース**、環境問題を時間軸で捉える**時間の部屋**、リサイ

クルの本質にせまる**起源（ルーツ）の部屋**、さらに、ミミズと一緒に大地と森の循環・再生について考える**循環の部屋**があります。

雨水資料館には世界の水問題をパネルや写真で紹介するコーナーや雨水事業者の会による雨水利用製品の展示もされていました。

3時から4時は「かけがえのない地球を次代に」と題する辰濃和男会長の講演が元体育館で行なわれ、参加者は聞き入っていました。その後は「交流の部屋」へ移動して交流会です。ビールとおつまみで、話がはずんでいました。

雨水利用を進める運動の目的は、私たちの市民の会だけでなく多くの環境問題の市民活動と提携して始めて達成させられるものでしょう。今後、そうした多くの人びとが参加する協力・交流の場として、また、子供たちの環境学習の場として、このふれあい館が活用されれば、まさに「時代を担う場」になるのだという感を深くしました。すみだ環境ふれあい館は、東武亀戸線小村井駅から歩いて15分、総武線亀戸駅からは明治通りを北にまっすぐ、徒歩25分ほど、スーパー・オリンピックの後ろです。団地の中にあります。ぜひ、気軽に立ち寄ってみてください。



参加しましょう！2001雨水セミナー IN 高松

今回、会員の皆さまには実行委員会発行の案内リーフレットを同封していますが、四国高松市での雨水セミナーに、ぜひ、多数参加されるよう、呼びかけます。

セミナーは8月3日（金）の自治体研究大会から幕を開け、8月4日（土）は午前中は市内の雨水貯留施設の見学などを予定しています。

8月4日、午後1時からいよいよ開会式です。高橋裕東大名誉教授、辰濃和男市民の会会長の基調講演は聞き逃さないようにしたいものです。3時15分から1時間半の予定で「地球環境と雨水利用」と題する鼎談が企画されています。加藤俊作（香川県雨水利用を進める会会長）、福島忠雄（日本雨水資源化システム学会会長）、吉野文雄（香川大学工学部教授）による鼎談です。ご期待ください。

そのあと、平安時代から伝わり、現在も日照りの年には中讃岐の滝宮神社などに奉納されている、国の重要無形民俗文化財の雨乞い踊り「滝宮念仏踊り」を観ることができます。夕方6時から、冷たい飲み物と料理を囲んで

高松のんびりとや各地の参加者と親睦を深める交流会。お楽しみに。

8月5日（日）はいよいよ最終日。9時から4つの分科会です。1、雨と仲良く 2、広げよう雨水利用のまちづくり 3、雨水利用技術のススメ 4、始めよう雨水利用の国際協力支援 となっています。詳しい内容やコーディネーター、パネリストについては、ぜひ案内のリーフレットをご参照ください。

11時半、全体会で、各分科会での話し合いの発表と講評、高松市長による「高松宣言」の採択の後、12時15分、閉会です。

県内の観光地や満濃池など、水にまつわる名所をめぐるオプションツアーも4コースあります。

セミナーへの参加申込は、個人で、直接、実行委員会までお願いします。オプションツアーと宿泊の申込は、6月20日（水）が締め切り日ですのでまだの方は早急に。

2001 雨水セミナーIN 高松実行委員会

電話 087-839-2126 ファクス839-2125

都市に自然を呼び戻す！ をテーマに開催

2001年8月4日（土）・5日（日）

<本大会・分科会>

会場：市川市文化会館（JR総武線本八幡駅南口徒歩8分）

参加費（4日・5日）：ひとり1000円（資料代として）

<こどもサミット>

会場：市川市立大町少年自然の家（雨水探検隊も参加します）

失って始めて、当たり前前の自然が身近にあることの大切さが分かります。この乾いた都市を潤いのあるまちにしていくには、地道にねばりつよく、力を合わせていく必要があります。大町自然の家では、子供たちは自然に触れて、多くのことを学ぶでしょう。

上記の高松での雨水セミナーと開催日が重なりますが、「雨水セミナーin高松」に参加が無理の方は、ぜひ、こちらへの参加を検討して下さるよう、お願いします。

問合せ先：第12回全国トンボ市民サミット千葉県市川大会実行委員会事務局
047-322-2733（12:00～18:00 平日のみ）

E-mail：zbb71316@park.zero.ad.jp

HP-URL：http://park.zero.ad.jp/zbb71316/index.htm

*申込みの受付は7月10日（火）まで。

第十二回全国トンボ市民サミット
八月四～五日 千葉県市川市で



二〇〇一年への思い

雨水利用事業者の会事務局長

笠原 斉

(株式会社) トーテツ

5月31日(木)、昨年の暮れに発足した雨水利用事業者の会の総会が、このほどオープンした墨田区の墨田環境ふれあい館で開催されました。当日は、徳永暢男会長のあいさつに続いて各会員のあいさつ、会計担当の谷田泰さんの決算報告などいくつかの議案がスムーズに承認されました。フリートキングの時間には活発な意見の交換があり、和気あいあいの雰囲気の中で閉会をいたしました。今回の総会には入会を希望しているいくつかの事業者の参加もあり、雨水利用に対する意識の広がりを感じました。

事業者の会は、発足して約半年と短い期間ですが、日本建築学会主催のシンポジウムに参加したり、ドイツから講師を招いて勉強会を行ったりと活動してまいりました。

今回、オープンしたすみだ環境ふれあい館(雨水資料館)でも、徳永会長や松本正毅さんにたいへんご苦勞をしていただき、多数の製品を展示できることになりました。(展示スペースにはまだ余裕がありますので、どんどん展示に参加してください)。

さて、今年は事業者の会としてもいろいろな目標を掲げていきたいと思っています。まず、8月には四国高松市にて2001年雨水セミナーが開催されます。四国には雨水利用機器メーカーがあると聞いていますので、お互いに交流を持ち、事業者の会に参加していただけるような機会にしていきたいと思っています。

それから、かねてより念願でありました事業者の会としてのカタログの作成もあります。各メーカーの製品を掲載した共通のカタログを作りたいなあとあります。現在、13社が会員として参加していますが、今年度にはさらに5社が新たに参加する予定となっています。関東圏だけでなく、関西、あるいは四国へと、事業者の会も全国的な会として輪を広げていけたらと夢を抱いているところです。

市民の会幹事で会の技術部会に所属する安藤勝治さんは、所沢市で安藤電気製作所を営んでいます。これまでも雨水の地下貯留層のフタの考案で全国発明コンクールの奨励賞などをうけた「雨水利用の発明家」でもあります。

この度は、トイレロータンの雨水切替装置を完成させました。以前安藤さんが試作した装置は、水道管に雨水管をT字型に繋ぎ、ワンタッチの切り替えで雨水をロータンクに流すというものでした。ところがこれは「クロスコネクション」と呼ばれ、水道管に汚水や雨水などの管を繋ぐという、日本の現在の水道法では禁止されている方法でした。あくまでワンタッチにこだわる安藤さんにとって、何とも厳しい法律

の壁でした。

構想から足掛け7年、ついに安藤さんの発明品が日本水道協会の認定をパスしたのです。それは、水道管と雨水管を繋がずに並列状態のまま、ワンタッチの同時開閉バルブによって切替える方法でした。

まさに、安藤さんの意地と粘りのたまものです。雨水資料館に展示されていますので、皆さんもぜひ実物をご覧になって、その発案の妙を味わってみてください。切替装置だけでなく、他にも数々の工夫がなされています。

なお6月26日の市民の会の総会当日にこの雨水切替装置の名前を募集します。インパクトのあるネーミングをお待ちしています。

やりましたね！

安藤勝治さん

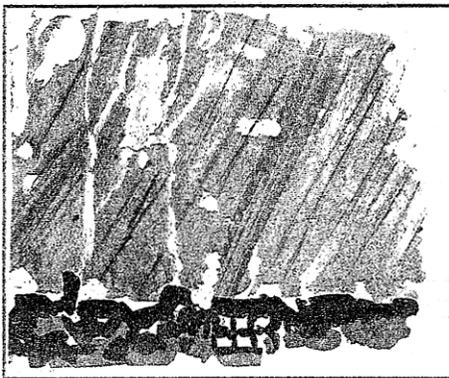
ヒ素汚染と雨水利用の調査

行って、見て、考えたバングラデシュ

◆ 東京都多摩立川保険所 星 美代子

成田からダッカまで、バンコク経由の1泊を除いて、約7時間を経てダッカ空港に降り立った。と同時にVIP待遇を受け、イミグレーションから通関までの一連の作業をPWDの役人に一任し、埃と排ガスのまちへと向かった。ダッカ中心部はまさに人と「リキシャ」の世界。人口の多さは日本に次ぐ世界9位、人口密度にいたっては世界ランキング第1位である。特に首都ダッカには人口が集中していることがまちなぎの様子からも窺える。排ガスでまちが霞むほどの大気汚染のなか、リキシャを操る人びとのたくましさで圧倒されながらも、この国にひそむ数々の問題を感じた。

経済的問題、生活の問題、教育の問題、健康の問題、環境の問題……。どの国にもいろいろな問題はある。途上国が抱える同じような問題がバングラデシュにも当然のようであった。そして、どの問題にもその根本にあるものは貧困であり、どんなに介入しようがそれが解決されなければ目先の問題解決になりかねない、という不安はあった。しかし、現実問題として、その目先のことで済ませるかぎりの方策をとらなければ被害は拡大していく一方であることは明確である。私がチームの一員として構成メンバーに加えられたのは、今起こっているバングラデシュでの問題が一方向からだけではアプローチしにくい現状があったためと思う。ヒ素に汚染された地下水の利用から雨水利用に変えることは、単にシステムを変えることだけで終わる問題ではない。「使用禁止」の赤いペンキが塗られた井戸を今でも使う住民。川の水が汚れていることを知っていても、無色透明な井戸の水がヒ素で汚染されていることは理解されない現実。雨が降らない季節があつて



も雨季に雨をためておこうとは思わない、雨を飲料水として利用することはない、もともと雨を使う文化がないところにどうやって普及させればよいのだろうか。非常にむずかしい問題である。今回実施したデモンストレーションもひとつの有効な方法であることは間違いないと思う。そのデモで作ったタンクを人びとはどう受けとめてくれるだろうか。自らの健康に直結する問題として捉えられるには時間がかかるが、あのタンクを使って人びとに雨の清浄さ、そしてそれから得られる健康を伝えるお手伝いができれば、それが私の役目ではないかと漠然と思った。

今回の滞在期間中、不運にもストライキにぶつかってしまった。予定していた行程を大幅に変更してのスケジュールであったが、またそれも途上国にはよくあることである。日常の不満や憤りが何かをきっかけにして爆発してしまうのであろう。貧しいながらも平和な、しかしそういった状況がいつひっくりかえってもおかしくない不安定な社会状況であることも私たちは認識しておかなければいけないことである。

最後になりましたが、今回バングラデシュの調査に参加させていただきありがとうございました。この場をお借りして、皆さまにお礼申し上げます。

市民の会のバングラデシュ第2回現地調査は、2001年2月11日から18日まで、総勢8人が参加して行なわれました。

今年度中に発行の「雨水年報」(仮題)に調査報告を掲載する予定です。

「すみだ環境ふれあい館」の見どころ

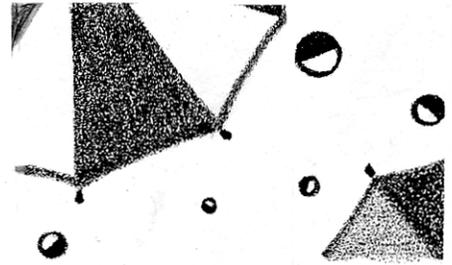
■ 鈴木陽子

「すみだ環境ふれあい館」で、まず目に飛び込むモルタルづくりの白い巨大な壺は、スリランカのカポチャ型雨水タンク。通りがかりの人も、もの珍しそうに覗いていきます。スリランカから来日した専門家の指導のもと、佐藤清さんをはじめとする会員の1週間にわたる大格闘の末に完成しました。表面のシンハリ語は「問題は水、解決は雨水」です。

菖蒲池にかかる美しい木橋は徳永暢男さんの力作。「ふれあい橋」と名付けました。美しい花や木は、皆、区民の方のご好意です。

建物の玄関部分が「雨水資料館」で、天井から吊るされた、オリンパス社寄贈のパナーで世界各地の雨水利用を紹介しています。ここで、ちょっと注意して見ていただきたいのが、展示を引き立てるさまざまなディスプレイ。実はほとんどが廃棄物なのです。反物の芯に使われる「紙管」、店先の天幕に使われる「オーニング生地」、東京都下水道局提供の「汚泥レンガ」、トウモロコシからつくった環境に優しいパッキング等々、私たちが生活や事業の中で出す膨大な「ごみ」が、松本正毅さんの魔法の杖と、ゴールデンウィークに手伝ってくださった大勢の会員の智恵と汗で立派な「材料」に生まれ変わりました。

「ふれあい館」は、既成の博物館ではありません。その名の通り、ここでみんなが、ふれあい、実践しながら環境問題を考える場所です。皆さんが日頃お考えのアイデアを、ぜひここで実現させてみませんか。



国際雨水センターの基本構想を企画したのが4年前。廃校の小学校をベースにした骨太?の案でしたが、こんなに早くその大きな一歩が「雨水資料館」として具現化するのは…。思いは実現する。風呂敷(理想)は大きくても具体的に思い続けることの大切さを実感しました。

展示企画として昨年末から村瀬さん、徳永さん、墨田区役所環境課の面々と検討し、視覚に訴え、実感し、考えてもらえる内容にと6コーナーを決め、村瀬さんの論文、市民の会の現地調査などからキーワード、写真を抽出・選択し、「水危機の世紀」として全体を包括した内容、ストーリーに苦心しました。

材料費・職工代も出ない低予算のため、1)材料は廃材を再利用する。2)展示パネルそのもので壁を構成する。3)素人で施工できるレベルの造作と工期(但し、安易な手作り感がでない仕様)。4)展示パネルで完成度・インパクトを高める、などの基本方針をきめました。

ここで2つの幸運がありました。1つは鈴木陽子さん。鈴木清掃局所長のおかげで紙筒などの廃材が入手できました。もう1つがオリンパス光学さんに展示パネル出力費用を提供していただいたことです。この2つが揃って初めて企画・設計にとりかかることができました。ファサードは徳永さんに任せて立派な日本庭園ができあがり、スリランカのタンクも国際性を表現する印象深いシンボルとして役立っています。

世界初の雨水資料館であると同時に、廃材再利用型施設(極限の低予算:内装25万円、照明別)として、ある完成度に達したことも世界初ではないでしょうか。これも祝日返上でお手伝いしていただいた市民の会、役所の方々などのおかげですし、「雨」の資料館に天が味方したとも言えるでしょう。感謝! 感激! 雨あられ!

工業デザイナー
松本 正毅

「雨水資料館」の施工を終えて

